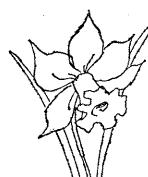


幼稚園における「読みこと」の指導

多 田 鉄 雄



社会、文化の現状から幼稚園の児童の文字に対する関心が強ま

つてしまつてゐる」とは、一般に認められる」とあり、これをどう

考えていくかは、いろいろの意味で問題になつてゐる。ベスタロ
ッチ・フレーベル協会機関誌の本年八月号は、この時期の児童の

「読みこと Lesen」——(以下ではこれをただ「読み」ということに

する)の問題について、その実験研究報告を「幼稚園における

初步準備段階的な読み Propädeutisches Lesen im Kindergarten」

という標題のもとで発表しているので、ここに紹介してみよう。

これは西ドイツのラインハウゼンにおける一九六六年以來の実

験研究である。その目標は次の二点であつた。

『1』、四歳から六歳までの児童の「読みの能力 Lesefähigkeit」

『2』、「読みを学び得るまでへの成熟 Leselerneife」——以下で

はただ「読み学習成熟」という範囲と限界。

2、この年齢グループは数年来から試みられてきた新しい「読み
を学ぶ方法」と、そこで用いられた教具に対して、どの程度ま
で適応できるか』

まず明らかにされなければならないことは、「読みを学ぶ
能力 Lesefähigkeit がある」ということは、直ちにそれが「読み
学習成熟」を意味するものではない」とである。

一人の人間に對し、読みの能力をつけ、読みを学ぶ能力をつけ
るということとは、おのおのの人間に天賦の読みに対する才能を個
人的に發達させ、促進することを意味する。

今日では、児童の脳髄の成育はほぼ五歳ころで大体八〇%を終
えていたことを、われわれは知つてゐる。したがつて、「読みを

「学ぶ」活動に進むべき、精神的な諸力はすでに用意されているわけである。ただその諸力は、かかる活動が刺激され、要求され、動かされない限り、まだ耕されない未開地として止まっているわけである。

この年齢の幼児は、すでに「学ぶ能力」は、したがって「読みを学ぶ能力」はついている。ただし、このことは「同時にすでに学ぶ学習成熟に達している」ということではないし、あるいはまだそこまではいっていないのである。

幼児が、読みを習得するに当たって根本的な意味を持つ諸機能の発達が、すなわち読みを学ぶ過程でなされる諸要求に適合し得る程度にまで成熟してきている場合に、換言すればこれらの諸機能がそこまで成熟している場合に、初めてその幼児は「読み学習成熟」を示しているものと認められるのである。

読みを学ぶ過程 Leselernprozeß での諸要求に適合するためにはすなわち「読み学習成熟」であるためには、ながんずく文字の形体の「形の把握 Formaufassung」を、「形を再現 Formwiedergabe」する能力が必要である。視覚的・聴覚的領域において、一つの組織的な知覚能力が、さらにそれに関連して、部分を内容的に把握する方法によって——その方法で、一つの物の名前・言葉を表わす文字形象 Schriftbild 例えば「おとうさん」という文字形象、および一つの物の名前・言葉を表わす音形象 Lautbild、例え「おとうさん」という音形象が、同一のものを指す文字と音であることを理解し、またそれを個々の部分に、例え「お」「と」「う」「さん」といったように分解したり、それらを区別したり、またそれらを、文字形象、音形象の種々の部位にあっても、または種々の結合の中につけても、例え「おとうさん」の「さん」と、「おかあさん」の「さん」とが、そして「十三」と「三十」の「十」とか「三」とかが、同一の文字であり、音であることを、さらに「さ」という文字、「さ」という音がいつも同一のものであることを理解したりする——それが可能となるのである。さらにそれがなぜ同一であるかを認証する能力が、要するに視覚的にも聴覚的にも文字形象、音形象を結合させながら、分析する能力が必要である。

読みを学ぶ過程の諸要求に適合するための、もう一つの前提是、シムボルということの理解である。すなわち言語が図式的表示によつて、すなわち文字という記号で示され得るということに対する理解である。

従来、人々は一般に「読み学習成熟」を、自然に発展していくもの、幼児がほぼ六歳ごろに、この成熟に達するものと信じていた。この見解の基礎となっていたものは、次のような理論であつ

た。「幼児はその発達の中で、間断ない経過・進行が妨げられることのないところの段階を歩んでいく。そして幼児が自らの力で『学習成熟』ここでは『読み学習成熟』に到達した時に、初めて人々は『読みを学ぶこと』を始めるべきである」

この「機の到るのを待つこと」「成長していくがままにまかせること」とは、結果として、幼児は要求されていないこと、低度の要求もされていないこと、ということになる。すなわち、それは適当な精神的活動をするように、適切な機会を幼児に与えないからである。

「ノハリ引合いに出されるのはハンセン(W. Hansen)が「教育的課題としての成熟」なる著書において「精神的発達は成熟の内在的な法則にしたがって、一定の過程を通じて進行するものでなく、それはむしろ精神的に発達していく者の活動 Aktivierung に基づくものである」という論証である。

「機の到るのを待つこと」「成長するがままにまかせる」と、よって就学前の幼児は、その発達に関して実際には本人ひとりに放任されていたのである。読み学習に必要な諸機能を成熟化させることは、偶然にまかせられていた。すなわち幼児の周囲の世界の、多かれ少なかれ促進的な刺激に、あるいは家庭環境に、あるいは幼児自身の手さぐり的な読みの試みにまかせられていた。

この年齢グループの幼児は、「作業を遂行」するまでの成熟 Werkkreife」および「課題遂行意欲 Aufgabewilligkeit」——すなわち仕事に対する意識的な心構え——を、まだ所有するに至っていない。

幼児は喜んで未知の課題と取組むが、しかしこの課題を首尾一貫して徹底的に遂行して行く能力は必ずしもないし、必ずしもそこまでのレディネスが出来ていない。このことは「読み」の指導が、遊び的な行動を超えて、いわば幼児にとって遊びだったもの

このように見てくると、就学前年齢における「読み」はけつして過大要求ではなく、幼児の素質として内在する諸力を促進・発展させることを、いわば幼児の精神的諸力を喚起することを意味する。

が仕事に化して来る場合には、特にしかしりである。

指導の間で見られたことは、四歳から六歳の幼児がまだしばしば「対象を対象として構えるディスタンス Distanz」に欠けており、あまりにもはなはだしく対象の中へ結合してしまうことである。

「読み」の授業、したがつて「読み方」では当然のこととして、なかんずく練習ということが要求される。またすでに一度行なった活動を繰り返すことが要求される。この年齢の幼児にとっては、かかるのことを自ら意識的に行なうレディネスはできていらない。新奇なもののがそこにはないからである。そこで幼児は「いんなどは、もう前に一度、したではないか」と考へ、「これをまた繰り返すことには興味を持たず、何かほかのことをしたがるということ」になる。

ただグループ指導でなく、個人指導で行なう場合には、上記の障害が、よりたやすく防がれ得るようである。それ故に個人指導においては、グループ指導におけるよりも、より早く「読み学習成熟」へ幼児を到達させることができる。

五歳から六歳の幼児の場合は、これとはちがつて、彼らのすでに目覚めた「学ぶ」とへの欲求 Lernbegierigkeit や、書くこと・数えることに対する興味、また文字そのものに対する興味

といったものは、「読み学習成熟」へ、したがつて「読み技術の習得」へと、促進させる可能性の、好便な出発点でありうる。かかる幼児にとっては、あたかもすでに彼らが長い間、待ち望んでいた新しい生活領域へ入る門が眼前で開かれたかのようであった。

彼らは幾分か「文字あさりの徒 Buchstabenjäger」にさえなつた。

もとより個々の幼児について見れば、その機能の発達は不調和的な発展であった。同年齢同士でも種々異なっていた。しかしどもかくもグループで「読み学習成熟」へと導いていく可能性はある。

以上の実験研究の結果からの結論は次のようなものである。

読みを学ぶことを五歳から始めるとは、それが学校においてであり、幼稚園においてあれ、不可能ではない。しかしそれを遂行するについては、いちじるしい疑問が存在する。例えば、現行の学校制度、学校組織との関係である。また幼稚園において「読み方を教授する」と Lesenlehren は、幼稚園の使命の領域を踏み超えることではないかという疑問がある。またこれは現在のところ幼稚園に与えられている可能性をはるかに超えるものではないかという疑問もある。

「読み方を学ぶこと」 Lesenlernen とは、ただ読み技術を獲得す

る」とだけを意味するのではなく、さらにそれ以上のことを意味するものである。

それ故に「読み方を教授する」と *Lesenlehren* は従来と同様に、今後も学校の課題でとどまる。なんとなれば、ただ読むことを教えるだけの者は、それは読み方を教えていることにはならないからである。

しかし他面からすれば、このような与えられている「教育の可能性」を放置しておくことは、幼児の発達の可能性について手段をつくさないことは、これも許されないことであろう。

この点に関して一つの解決策が与えられていると考えられる。

それは幼児にすでに現存している能力を活動させて、その能力を、学校における「読み学ぶ過程」につなげるようにすること、すなわち「幼稚園における初步準備段階的な読み Propädeutisches Lesen」の導入によつて、実りあるものにさせる、ことである。

「読み方」は、ドリルとか、読解力をつけ、読むことを通じて事理をわきまえ、物事を理解し、思考することを、指導することなどを含んでいるが、ここでは、かかる指導の手前で、文字に親しませようというのである。

その方法、教具について詳しく紹介する余裕を持たないが、簡単に述べれば、物の絵のカードの下に、物の名前が筆記付活字でのっているカードと、文字が無く物の絵だけのカードと——両方のカードは対応しており、そこには「家庭」とか「台所」とか「私の玩具」とかのテーマで十六ずつの物の絵がのせてある——さらに物の名前だけが一つずつせてある小さいたくさんのかード、また物の名前の文字が部分的にのせてある、同じく小さいカード、例えば「マナイヤ」の部分「マナ」とか「イタ」だけがのつてあるカードが教具である。

これを用いて、物の名前をいわせ（音形象）、物の名前の文字を示し（文字形象）、物の絵の下に、名前の文字を正しくのせたりなどの遊びを、あるいはグループで、あるいは個別に行なうというわけである。

この方法は現在、いくつかの幼稚園で試みられているが、それび的な形で以て「読み」を学習し得るように、成熟させらるべき諸機能を育てていくこと、すなわち幼児を「読み学習成熟」へまで育てるを使命とするものである。

— 6 —